

# I 研究開発の概要

## 1. 研究のねらい

### 小学校における「公共性」を育む「シティズンシップ教育」の内容・方法の研究開発

本校における「シティズンシップ教育」は学習において「公共性」を育む授業改善の取り組みである。ここで定義する「公共性」とは、「子ども達が友だちと自分の違いを排除せずに、理解し考える力を発揮すること」であり、そのためには教師自身が民主主義に基づく社会生活を創る資質・能力を探求し育成する視点と力量をもつことが必要である。子ども達に授業（学習）を通して育てる資質能力が「公共性リテラシー」である。「公共性リテラシー」は全学習分野において育成する。「公共性リテラシー」を育む教育課程の内容は『学習における「公共性」育成プラン』にまとめ、さらに、校内研究を教師の学びあいとして持続可能なものにする授業研究のあり方を提案する。

## 2. 研究仮説～どのような手段を考えたか～

### (1) 協力学年担任制

個々の教師が他の教師と協力して子どもを育てるという考え方から「協力学年担任制」を採用する。

### (2) 学習分野担任制

全ての教科（学習分野）で「公共性」を育むことをねらい、目の前の子どもの実態から教育内容や方法の研究を具体的に進めるために、「学習分野担任制」を採用する。「協力学年担任制」で安定の基盤をつくった上に教師の専門性を生かして子どもを育てるという考え方である。

### (3) 各学習分野で『学習における「公共性」育成プラン』を作成する

全ての学習分野において、「公共性」育成に資する教育内容や適切な方法を抽出し、本校オリジナルの『学習における「公共性」プラン』を作成する。その中で、学習分野で育む「公共性リテラシー」を明らかにする。

### (4) 「公共性」を高める校内研究体制を構築する

【授業者が学習指導案を考える ⇒ 校内授業研究会 ⇒ 実践記録を授業者が書く ⇒ グループで読みあい省察する ⇒ 各自の授業改善に活かす（実践者は記録を書き直す）】という専門職としての教師の対話的な校内研究サイクルを確立する。

## 3. どのような成果を期待したか

### (1) 協力学年担任制

複数の担任教師が一人ひとりの子どもに学習指導と生活指導に関わることによって、子ども側は多面的な見方や価値観にふれることができ、よりどころを得て精神的な安定感につながる。様々な教師の人間性や指導法に触れて異なる価値観や意見に出会い、いろいろな立場で考える機会が増えるので「公共性」を育むことへ促進的に働く。

教師の側からすれば、「公共性」育成を異分野の視点で考えるチャンスが増え、個々の教師が経験的に把握している実践上の知見に異なる多様な視点が加味され、各自の実践を工夫し改善することにつながる。

## (2) 学習分野担任制

教師の専門性を生かすことができるので、学習内容や方法の研究が進む。授業に工夫を加えて、子ども同士が関わりあいながら創造的、専門的に学ぶ機会が増える。また、各学習分野研究が活発になり、「公共性リテラシー」についての議論が進む。

## (3) 各学習分野で『学習における「公共性」育成プラン』を作成する

「公共性リテラシー」を6年間の教育課程全体の視野から整理することができるので、当該学習分野で計画的かつ省察を加えながらの実践を行うことができる。

## (4) 「公共性」を高める校内研究体制を構築する

教師個人では気づかなかった子ども同士の関係の変化や子どもの学びのよみとり方を知ることができる。「公共性」や「公共性リテラシー」に関して、他の教師の考えを受けとめて共感的・批判的に試行錯誤することができる。そのことによって、自らの実践に工夫を加え続けようとする意欲と実力が高まる。

## 4. 教育課程の特例

教育課程を、「学習分野」（ことば・市民・算数・自然・音楽・アート・生活文化・からだ・なかま）と「創造活動」で編成する。

## 5. 研究内容の概要

### (1) 新しい教育課程の内容

#### ① 開発する教育課程の目標…「公共性」を創る

前回の研究開発（H17～H19）では、（図1）にあるとおり、協働して学び生み出す子どもを育てる3つの視点のひとつに「公共性」があることを提案した。

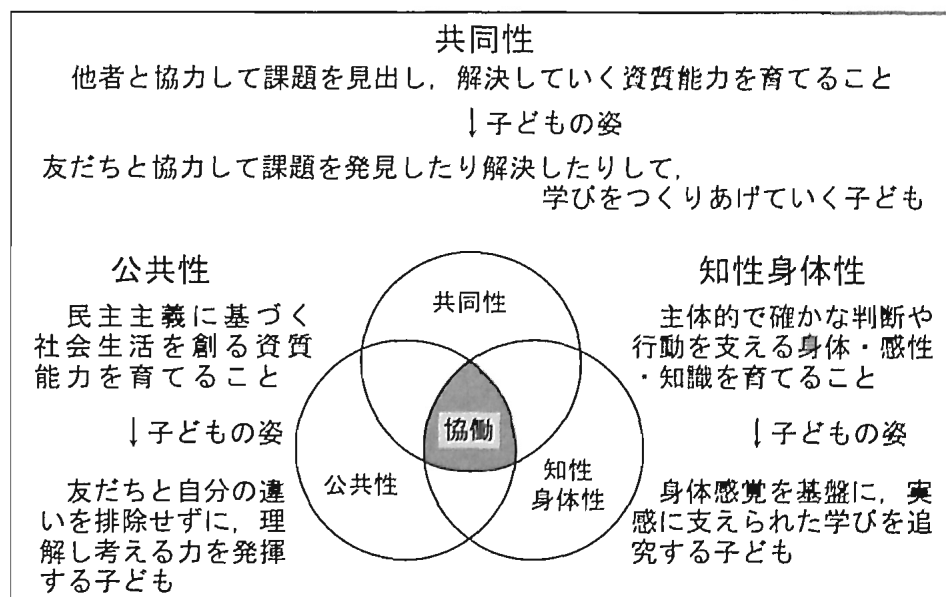
今回（H20～H22）は、特に「公共性」に焦点を当てて、小学校教育課程で育成できることは何か、教科（学習分野）で必要な内容・方法を開発した。その際、教師自身の授業改善を基盤として研究を進めた。

研究の動機は昨今の児童

の実態や、子どもを取り巻く現状社会の文化や価値のおき方、学校教育が担うべきこと、教師たち自身が創る教育課程のあり方などへの問題意識である。例えば、主張はするが他者の声を受け止められない、白か黒か決着をつけたがる、権威に弱いなどの児童の実態が見られる。これは現代っ子の一面であろう。ここからは学習の場において、関わりあいの質を丁寧問い直し、現代社会の複雑で多様な問題から目をそらさずよく考え判断する子を育てる、という教育課題が見いだせる。

（図1 2009 第71回教育実際指導研究会発表要項 P11）

### 協働して学びを生み出す子ども（定義）



お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校・中学校

そこで本校では3年間の研究課題として「公共性＝友だちと自分の違いを排除せずに理解し考える」を取り上げたのである。

また、一方で、近年のシティズンシップ教育の潮流の中で、本校の教育課程の特色を明確にする必要がある。

シティズンシップ教育とは、学校教育と社会教育の境界を越えて多様な可能性をもつ研究領域である。私たちは国内外の先進的な取り組みを参考にしつつ本校の開発で担うべきことを探った。

シティズンシップの定義については、『シティズンシップ教育宣言』（経済産業省2006「シティズンシップ教育と経済社会での人々の活躍についての研究会」編）にある「多様な価値観や文化で構成される社会において、個人が自己を守り、自己実現を図るとともに、よりよい社会の実現に寄与するという目的のために、社会の意思決定や運営の過程において、個人としての権利と義務を行使し、多様な関係者と積極的に（アクティブに）関わろうとする資質」を参考にした。

では「公共性リテラシー」とは何か。

これからの世界・日本を担う子ども達（将来の市民）には、自分やの周りの人や社会に愛着をもち、もつがゆえに公（パブリック）を良くしたいと考え判断し行動することが求められる。先ほどのシティズンシップの定義にあるように、自分の属する社会を理解し、その社会からより広い世界への問題関心をもつだけでなく、自分の役割を理解して社会を育てることも必要である。そのような市民として生涯にわたり学習し成長していくためには、小学校の発達段階にふさわしい「公共性＝友だちと自分の違いを排除せずに理解し考える力を発揮すること」が十分にできるように育てることが基盤になる。

以上のような考えに基づき、本校では授業を通して育てたい「公共性」に関わる資質能力を「公共性リテラシー」と名づけた。

そしてシティズンシップ教育を特定の教科領域で行うのではなく、全学習分野を通して行う教育と位置づけた。シティズンシップ教育をトピック的な教育活動ではなく、日常的な授業改善としてカリキュラム全体に浸透させるものと捉えたのである。

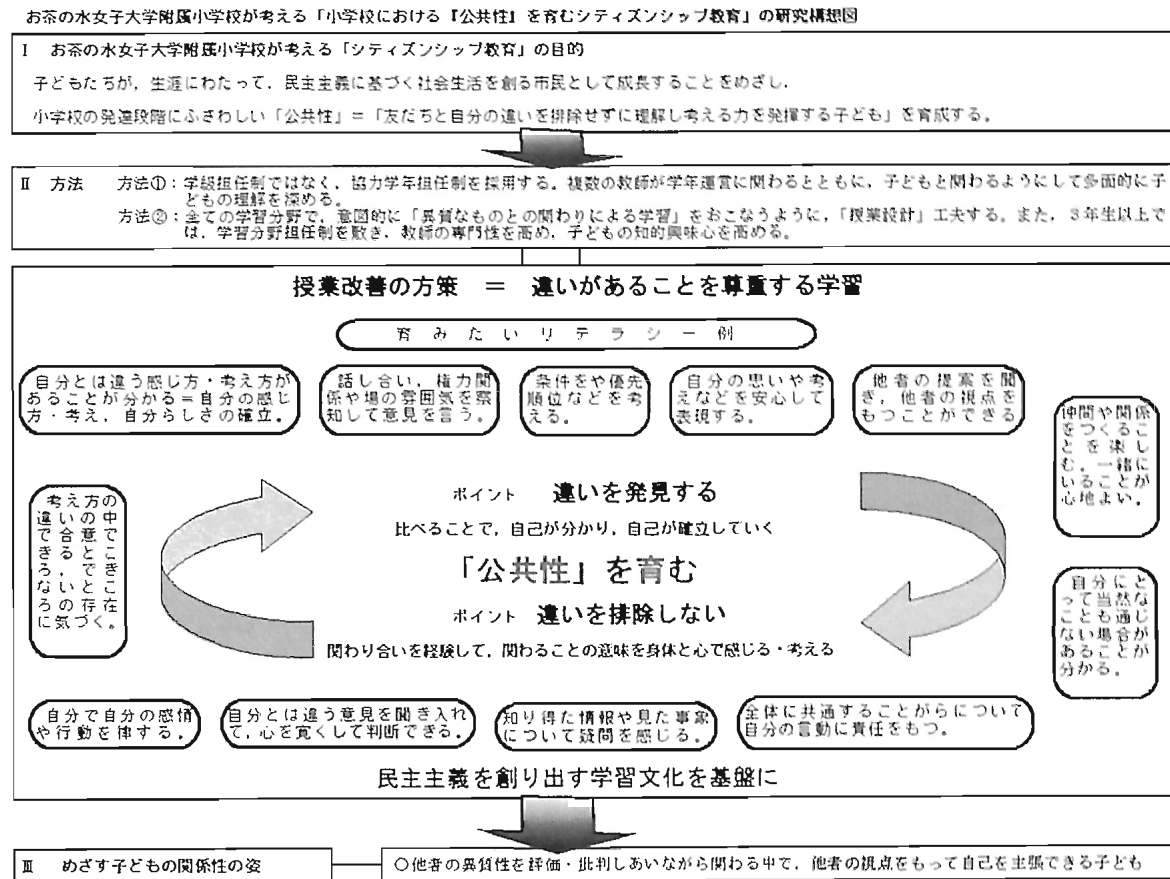
つまり学習分野（教科）の授業において「公共性」を高め「公共性リテラシー」を育てるといふ、日常の授業中心の立場をとる点に、本校の実践研究の特色がある。

研究課題を整理すると、以下のようなになる。

○「公共性」	教育研究の目標
○「シティズンシップ教育」	教育内容・方法（各分野の授業改善）
○「公共性リテラシー」	授業を通して子どもに育てたい資質能力

② 研究全体構想図

(図2 2009 第71回教育実践指導研究会発表要項 P13)



③ 「公共性リテラシー」について

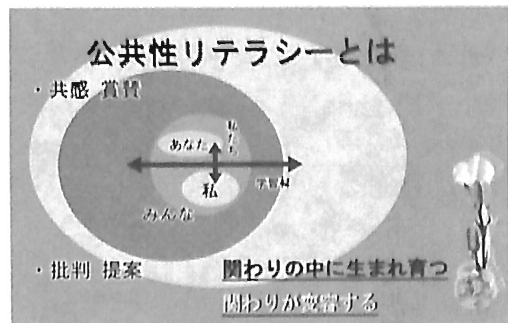
(図3)

「公共性」を高め「公共性リテラシー」を育成することの意義



遠い願い：子ども達が、生涯にわたって、民主主義に基づく社会生活を創る人間として成長すること

近い願い：子ども達が、友だちと自分の違いを排除せずに理解し考える力を発揮すること



リテラシーとは、一般的に言えばもともとは「文字の読み書き能力」のことであり、教科を中心とする「教養的リテラシー」として発展した。しかし1990年代以降、高度情報化社会の到来によって、学校におけるリテラシー観は変様を迫られ、PISAに代表される実社会での活用を重んじる「機能的リテラシー」が重要視されるようになった。

本校でもそのような学力観の変遷を理解した上で、さらに「私」「あなた」「私たち」「みんな」の関わりに着目し、関わりの質を授業（学習場面）で問い直していく。

関わりの質の民主的な変化を促し「公共性」につながるような資質能力を「公共性リテラシー」と定義したのである。

「公共性リテラシー」とは、授業場面において、感じ方考え方が複数であることをいかに対話的・応答的に乗り越えるか、違いを排除せずによりよい学びをつくりだせるか、など、関わりの質の民主的な変化を担う資質能力である。

「公共性リテラシー」は個人に固着した力というよりは関わりや学びの文脈に沿って生まれ育つ

ものである。授業をつくる子ども同士だけでなく、子どもと教師の関係性を問い直すという性質もある。

1・2年次報告書にあるとおり、学習分野ごとに養成しやすいリテラシーがあることや共通して育むリテラシーの存在が議論の焦点となり、それぞれの分野の特徴を授業研究に即して議論した。

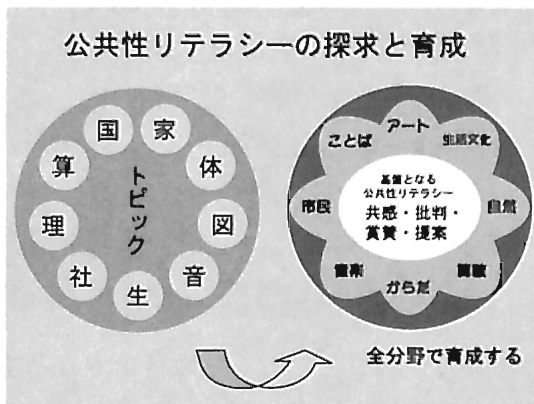
2年次には仮説として全学習分野で共通の「公共性リテラシー」を「共感・賞賛・批判・提案」の要素で考えることを出発点に、各学習分野の特徴を活かして育む「公共性リテラシー」を探求し、お茶の水版『学習における「公共性」育成プラン』にまとめる作業に着手した。

その際、学習分野は中学校・高等学校の教科につながるものであることから、中・高の教育課程との連続性を問う必要が出てくる。今回の3年間の開発では小学校の発達段階に焦点を当てているが、「公共性リテラシー」については附属の立地を生かし、中高大学教員からのアドバイスを得て探求してきた。

各学習分野に共通する「公共性リテラシー」の要素 ( )内は子どもの姿の一例

共感 (いっしょに居て息や声を合わせる心地よさや喜びを感じる。似た感じ方や考え方がわかる)  
 賞賛 (相手の考えや作品の良さをみつけることができる。どこがよいのか言える。長所を探す目をもつ。違いを発見することができる。違いを恥ずかしがらず、また受け入れる気持ちをもっている)  
 批判 (違う立場や考え方のすじみちを理解することができる。違う表現を即座に否定しない。比較して考えるための知識を得ようとする。なぜ、そう思うのか、根拠を言うことや問うことができる)  
 提案 (こわす批判ではなく創る提案にもっていく思考ができる。判断に責任をもつ姿勢がある、説得やプレゼンテーションの力がある。異なる意見をよく聴いて、違うわけを考えられる)

(図4 「公共性リテラシー」の探求と育成)



授業研究と省察を通して4つの要素をもとに多様な「公共性リテラシー」の探求を進めた。学習中の子どもの姿から探ることによって、違いを考えながら聞く、意見の理由を言う、あいまいな点を質問するなど、「公共性リテラシー」の具体的な姿を洗い出す。それは④『学習における「公共性」育成プラン』に結実したと言える。

一方で、「公共性リテラシー」の育成には、指導上の工夫や単元開発に取り組む「教師の協働」が欠かせない。例えば、表現する場づくり、対立する考えが出るような題材の工夫など一人では気づかない実践の改善を、語り合う授

業研究システムをつくることによって可能にしてきた。

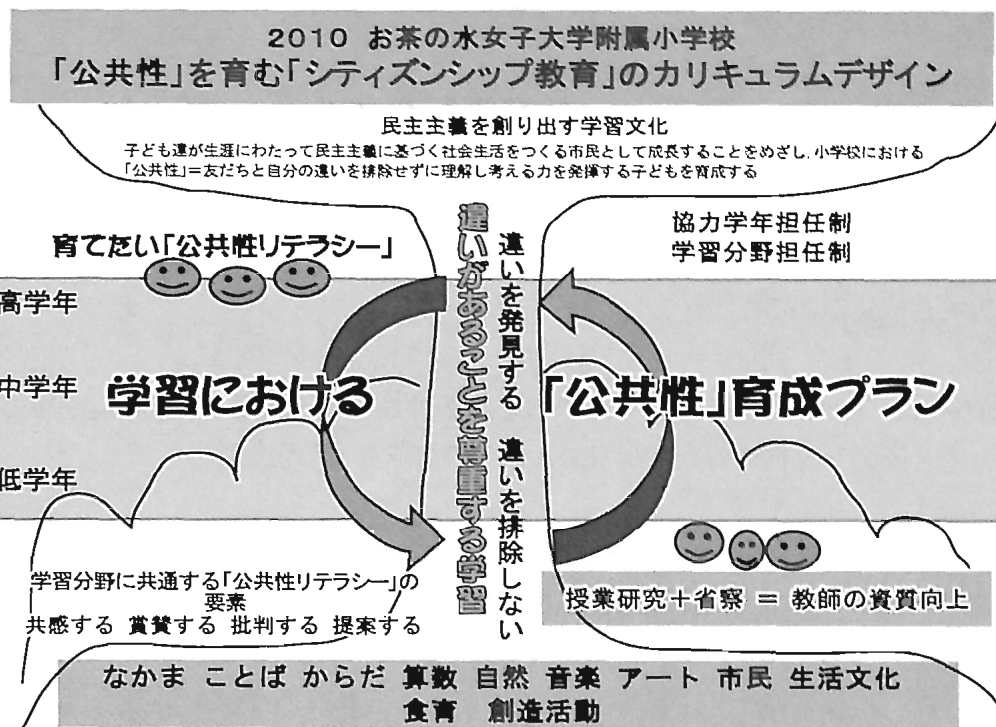
(授業研究の詳細はⅢ-3と4)

④ 『学習における「公共性」育成プラン』の作成

各学習分野の目標は学習指導要領(教科)と比較検討をしながら「公共性」に近づく特色を考えた。次に、学習分野で育てる「公共性リテラシー」を明確にし学習活動例も若干記載した。2年次に中学年を対象に作成し、3年次には低学年・高学年にも広げて教育課程上8つの学習分野の「公共性」育成プランとして提案するところまで研究を進めることができた。

ただし、『学習における「公共性」育成プラン』の試みは途上にある。プランは常に修正され、教師が子どもの学びの姿を「公共性」の視点でよみとることや、現状を見直すことにつながっているからである。これは同じ分野だけでなく異なる分野の教師の対話を生み出している。

(『学習における「公共性」育成プラン』の実際はⅢ-1と2)



### ⑤ 教育課程表（別紙1）

H13～H15附属幼稚園と、H17～H19附属幼稚園・附属中学校と共に開発した「学習分野」による教育課程編成を継続した。「学習分野」とは、子どもの生活を大切にする幼稚園の「保育分野」の考え方を生かして、幼・小「接続期」研究から生まれた概念である。「学習分野」の趣旨には、教科の目標・内容・方法を目の前の子ども達の学びや発達に照らしながら柔軟に組みかえ、一人一人の学ぶ意欲やみちすじを大切に展開すること、教科の垣根を低くして教師同士の協働を活性化する姿勢が受け継がれている。

（参考）本校の「学習分野」に対する考え方は、「幼稚園及び小学校における教育の連携を深める教育課程の研究開発～関わりあって学ぶ力を育成する教育内容・方法，平成14年度第2年次報告書」P11に以下の記述がある。

関わりあって学ぶ力を育てるために

#### （1）個の学びの確立

- 身体感覚を十分に働かせ、自らの学びが実感できるような学習活動を組織すること
- 内面に揺さぶりをかけ、多様な情動を喚起し自分なりに表現できるようにすること
- 互いの違いを認め合うことから、認知の変容、深まりを促すようにすること

#### （2）協働と学び

- 個々の違いを互いに受容，承認，尊重する姿勢をもたせること
- 関わりあいの中で起こる迷い，葛藤，試行錯誤を積極的に生かすこと

3年次には、ことば，市民，算数，自然，音楽，アート，生活文化，からだ，からだ（保健），食育の授業研究を行い、「公共性」を育む教育課程の内容や方法を全体で検討した。創造活動については、本校の研究史上重要な部分であるが、今回の開発では学習分野の内容・方法を重点的に整理した。今後創造活動と学習分野の関連について改めて研究を広げていく予定である。

食育に関しては、学習分野外の給食指導の一環として位置づけた。給食指導の発展として、内容的に関連する学習分野と連携して取り出し授業を行う場合もある。本校では給食施設の新設置に伴い食育を2009年度から本格的に始めた。教育課程上の位置づけについては今後も検討を加えていく。

## 新しい教育課程の工夫

・教育課程全般については、子どもの学びの姿を的確に捉えて、ねらいを明確にするために、子ども達に育成したい資質能力を幼・小・中連携でまとめた『学びの概要2007版』（全学習分野で作成）がある。

・「子どもの姿」については、小学校における「公共性」＝「友達と自分の違いを排除せずに理解し考える力を発揮する」の視点で、学びの姿を見直した。

・学習分野の「目標」は、学習指導要領で重視している「思考力・判断力・表現力」を人との民主的な関わりの中で長期的な視野をもって育てていくためにも、「公共性」の視点で見直したものである。

・「公共性リテラシー」は、「目標」を達成するために、子ども達に育てる資質能力である。

・「目標」と「公共性リテラシー」については、各学年で大切にしたい学びについての視点から、低・中・高学年で「内容や方法」を整理し、『学習における「公共性」育成プラン2010版』にまとめた。

・「評価」については、「協働して学びを生み出す子どもを育てるための教師の指導や支援」の研究の成果を生かして評価手法を見直し、実践記録の省察に重点を置いた。

## 『学習における「公共性」育成プラン』の表し方

- \* 子ども達の「公共性」育成はスパイラルに捉えられることから、学年の区切りは低中高をめやすとして、その学習分野全体で育てる「公共性リテラシー」と、それにふさわしい内容を表した。
- \* 学習分野における全体的な子どもの学びの姿・教師の配慮は、『学びの概要2007』で表すこととし、『学習における「公共性」育成プラン』には、その学習分野で「公共性」に関して大切に学習内容・学習経験・環境構成・留意点等をより具体的に表した。